2018 年 8 月２９日の松谷兄のお手紙の抜粋

新任のディレクター（刑務所所長）になってから、消灯時間の規制が始まり、厳重な捜査が行われた結果、今だにシャブや携帯電話が次々と発見され、宅配の荷物の箱からタバコの葉っぱが出てくることになり面会などが厳しくなりました。そういう矢先に左足の神経痛が悪化し、教会に行くにも杖が必要になり、現在は房で静かに過ごしています。その一週間後には突然何の前触れの予告もなく、私の生活している房はすべて取り壊しの命令が出て全員私物をまとめて違う場所に移されました。大事にしていた水容器などもバケツ、タオル石鹸、聖書の一部もなくなってしまいました。また、移された新しい場所は 2 階ですので、（前のように毎日）教会に行くこともできなくなってストレスが溜まらないように静かに座ってできるだけの時間を許す限り聖書に親しむようにしています。

第１１回　モンテンルパの夜は明けて

私が収監されている刑務所という一種独特な社会の中では、囚人の日常生活は閉塞感で満ち溢れ、ジレンマを前にしたら、つい安易で安直な「わかり易い」道を選択しがちです。 ジレンマと戦うのではなく、 ジレンマを受け止め、むしろ見つめる覚悟を持ち、気負うことなく付き合うことで、必ず光はさしてくる、つまりジレンマを楽しむことが大切ではないのでしょうか．．．．　聖書では、最も重要なことと　そうでないことを見分ける「価値観」を持つことを教えてくれています。 ピリピ 1:9-10「知る力と見抜く力とを身につけて…本当に重要なことを見分けるように…」
ここモンテンルパ刑務所は、ある意味においては、人生の縮図でもあり、多くの人はここを”終着駅“だと云うひともいれば、”悪の温床“だと言い切る人もいます。ここに収監されている約 2 万人のほとんどはキリストの教会とは無縁です。そしてすごく暗い顔をした囚人が多いのも事実です。”ジレンマのかたまり“を自分 1 人が背負って自分の力ではどうすることもできないのです。

マタイの福音書 11:28 ではイエス様が” 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」とおしゃっています。休ませてあげる、英語では Rest にはイエス様の愛、いやし、そして平安（平和）が含まれているのです。イエス・キリストは“平和の君”でもありますからこの招きはすべての人に向けられた言葉であり、主におまかせしたら最善を用意してくださる方がいらっしゃると信頼したら、きっと喜びが沸くでしょう。
私は悩みを持つ多くの囚人の方に、私がそうであったからこそ、キリストの教会へ足を運ぶようにそのきっかけを作ることに努力しています。

また、いつの日か皆様がゲートをくぐられて入って来られるのをワクワクしてお待ちしたいものです。あの頃に比べたら少し寂しいくらいに人がいなくなりましたが……　　ありがとうございます。　　（松谷兄弟）